

THE NATIONAL  
ART CENTER, TOKYO

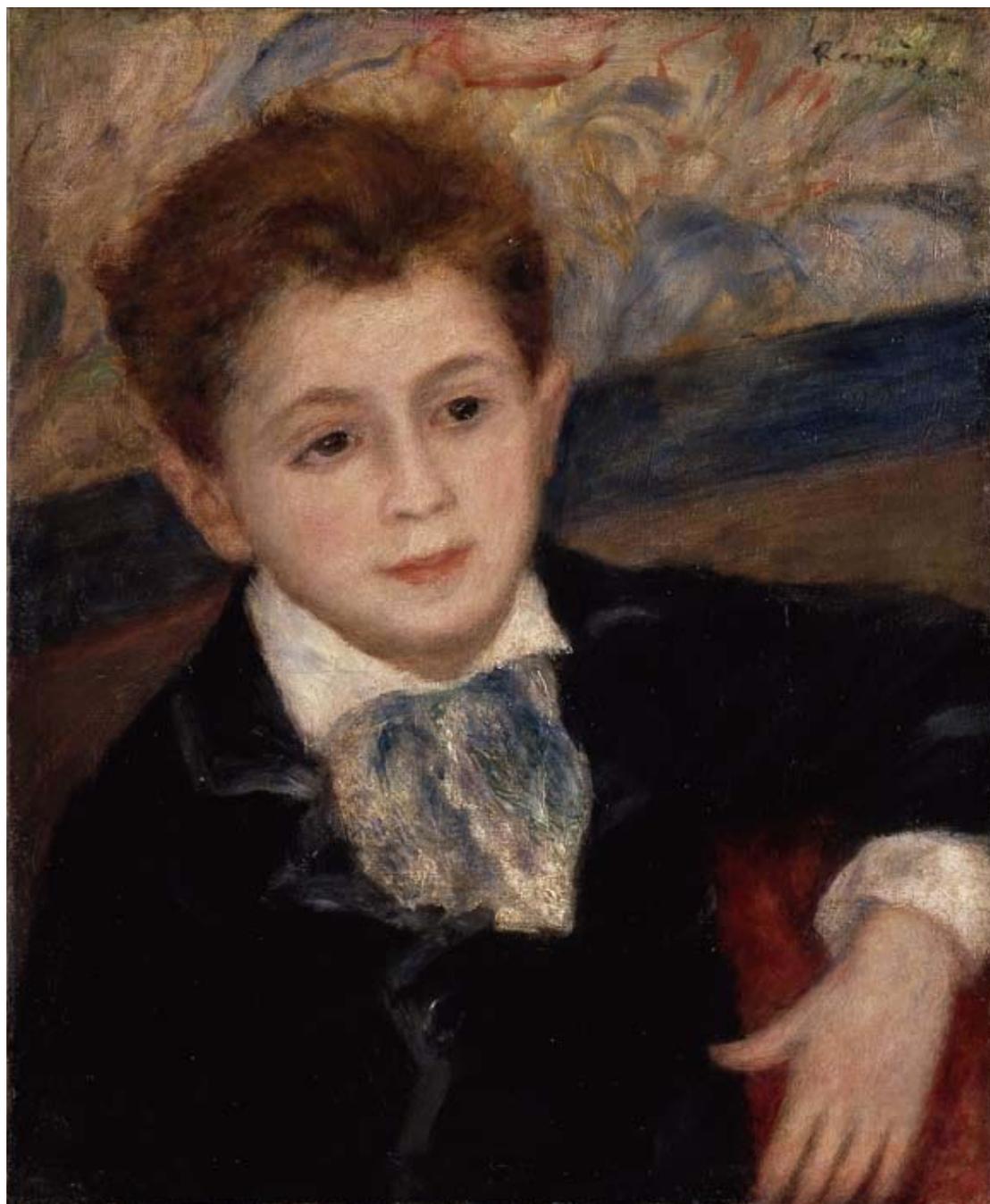
NEWS

国立新美術館 ニュース

NO. 13

JAN.

2010



ピエール=オーギュスト・ルノワール《ポール・ムーニエ》1877年頃 ラングマツト財団  
Pierre-August Renoir, *Paul Meunier*, ca.1877, Museum Langmatt Stiftung Langmatt Sidney und Jenny Brown, Baden/Schweiz

## ルノワールと堀辰雄——文学からみる「フランス印象派」

荒屋鋪 透

昭和7年、西暦1932年の夏、東京本郷の書店で1冊のルノワール画集をみつけた日本の小説家がいる。それはルノワールの生前、1913年のパリ、ベルネーム=ジュヌ画廊における回顧展を機に出版された画集であった。美しい図版とフランスの画家、文学者などによる、ルノワール論の抜粋や回想を満載した豪華な造本であり、そこには、いま国立新美術館で開催中の『ルノワール——伝統と革新』展に出品されている、油彩画《水のなかの裸婦》(1888年、ポーラ美術館)も掲載されていた<sup>1</sup>。

「この間僕は本郷の古本屋でルノワールの素晴らしい画集を見つけた。そしてどうしてもそれが欲しくてたまらなくなつて、昨日、とうとうそれを買ってきた」<sup>2</sup>(引用は筑摩書房版全集に拠るが、初出『椎の木』掲載の本文には異同がある)。3年前の冬、雑誌『文藝春秋』掲載の「不器用な天使」により、颯爽と文壇デビューを果たした24歳の新進作家、堀辰雄(1904-1953)はさらに昭和5年の『改造』に「聖家族」を発表するなど、昭和のモダニズム文学で特異な地位を与えられていたが、この頃、友人の神西清からおくられたフランスの小説家、マルセル・プルーストの作品や批評

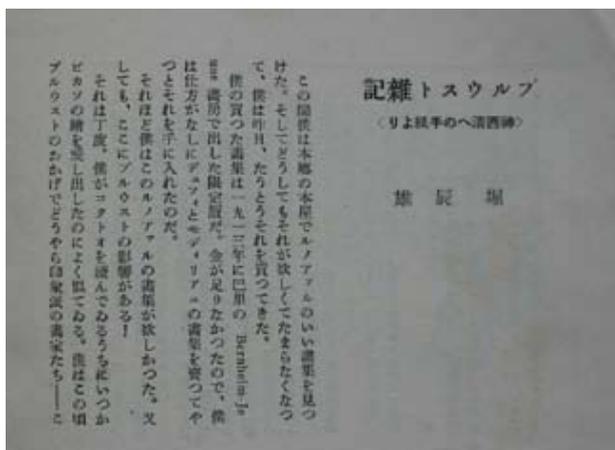
を読み耽っていた。彼の購入した画集は高価な600部の限定版である。「金が無かつたので、僕は仕方なしにそれまで大事にしていたデュフィとモディリアニの畫集を賣つてやつとそれを手に入れた」<sup>3</sup>。翻訳『コクトオ抄』(昭和4)など、すでにジャン・コクトーの文体を模索していた堀には、デュフィやモディリアニをはじめ、ピカソやキリコといった20世紀美術との接点はあった。しかしコクトーから離れて、彼はプルーストについて言及する。「それほど僕はこのルノワールの畫集が欲しかつたのだ。またしても、ここにプルーストの影響があるらしい」<sup>4</sup>。

マルセル・プルーストは『失われた時を求めて』の一篇「ゲルマンのほう」(1920-1921年)において、ルノワールの絵画が、あたかも目の治療を施す眼科医のように、同時代の人々のものの見方を変えてしまったことを指摘している。「通りを歩く女たちも、昔の女とは違って見えるが、それはルノワールの描く女だからにほかならない」<sup>5</sup>。また他の一篇「見出された時」(1927年)のなかでは、具体的な絵画を例に採りながら、ルノワールの肖像画の新しさを指摘する。「後世にとって、現代

のエレガントな家庭や美しい衣装のはらんでいる詩は、コットやシャプランの描くサガン大公夫人やラ・ロシュフーコー伯爵夫人の肖像画よりも、ルノワールの描く書店主シャルパンチエのサロン(稿者註：《シャルパンティエ夫人と子どもたち》、現在メトロポリタン美術館)のなかに見出されるのではなからうか?」<sup>6</sup>。

実はルノワールの亡くなった3ヶ月の後、プルーストは『オピニオン』紙(1920年2月28日)に寄せたアンケートのなかで、ルノワールに関する愛好ぶりを表明しているのだ。このアンケートは、ルーヴル美術館に新たにつくられた、イタリア絵画のための特別展示室に次いで、フランス絵画の特別展示室に飾られるべき8点の作品を、識者に求めたものであった。「私としては次の諸作をあげたいと思います——シャルダンの『自画像』、同じくシャルダンの『シャルダン夫人の肖像』、同じく『静物』、ミレーの『春』、マネの『オランピア』、ルノワール一点あるいはコローの『ダントエの舟』あるいは『シャルトル大聖堂』、ワトーの『つれない男』あるいは『船出』」<sup>7</sup>。このルノワールの1点が、どの作品に当たるのかは定かでない。当時ルーヴルには、《シャルパンティエ夫人の肖像》(1876-1877年、現在オルセー美術館)や1914年のカモンド伯爵家遺贈の作品3点が所蔵されていた。ルノワール作品のはじめての国家購入は1892年、《ピアノを弾く少女たち》(オルセー美術館)だが、それは現代美術の陳列館であるリュクサンブール美術館にあった。

「こんな工合に僕がコクトオを通してピカソやキリコの繪に興味を持つたり、プルーストの影響でルノワール等が好きになつたりするといふことは、それを裏がへしにして考へて見ると、コクトオはピカソやキリコ等の



堀辰雄「プルースト雑記」の初出、『椎の木』(第八冊)昭和7年7月



堀辰雄『美しい村』野田書房、扉口絵、昭和9年4月

畫家に、そしてプルーストは印象派の畫家たちに多くのものを負うてゐるやうなことになるはしないだらうか？<sup>8</sup>。1932年という早い時期にプルーストを紹介しながら、堀はプルーストが影響を受けた画家、ルノワールを想起している。コクトーを読みながらピカソやキリコの繪画に親しむように、プルーストの小説からルノワールの世界に分け入った小説家は、そのテキストのなかに印象主義を読み取る。「別館の窓ぎはに、一輪の向日葵が咲きでもしたかのやうに、何んだか思ひがけないやうなものが、まぶしいほど、日にきらきらとかがやき出したやうに思へた。私はやつと其処に、黄いろい麦藁帽子をかぶつた、背の高い、瘦せぎすな、一人の少女が立つてゐるのだといふことを認めることが出来た<sup>9</sup>。これは堀辰雄の小説『美しい村』のひとつの章『夏』の一節だが、夏の日の眩しい陽光に輝く向日葵に譬えられた、この少女は、『美しい村』にはじめて描かれ、『風立ちぬ』にふた



ピエール＝オーギュスト・ルノワール《野原で花を摘む娘たち》1890年頃 ポストン美術館 Photograph © 2009 Museum of Fine Arts, Boston

たび登場する。その「黄いろい麦藁帽子」をかぶつた彼女は、ルノワールを見たものには、あるいはプルーストを読んだものには、まさにルノワールの描くモチーフそのものに見えてくる。

『不器用な天使』や『聖家族』など、都市文学から出発した堀辰雄は、この『美しい村』の舞台である軽井沢で、高原を背景にした全く新しい文学を確立する。その外光のなかに描かれた少女は、まさにルノワールの繪画世界に棲むヒロインなのではなからうか。1930年代の日本文学において、画家ルノワールはあらためて評価されている。

(あらやしきとおる ポーラ美術館学芸部長、本展監修)

〔付記〕

なお引用文は、昭和初期の文体の感性を留めるために、旧かな使い、新漢字(一部旧漢字)と変則的に紹介した。堀辰雄『美しい村』は新潮文庫『風立ちぬ・美しい村』などで読むことができる。

- 1 Renoir (Préface d'Octave Mirbeau), Paris, Bernheim-Jeune, Éditeurs, 1913.
- 2 堀辰雄『プルースト雑記 神西清に』、『堀辰雄全集』(第三卷)筑摩書房、1996年9月(初版第4刷)、365頁。なお全集は、初取単行本の『狐の手套』(野田書房、昭和11年)に拠っている。初出は、『プルースト雑記(神西清への手紙より)』『椎の木』(第八冊)『椎の木社、昭和7年7月、10頁)であるが、該当箇所を図版に掲載した。そこには、「この間僕は本郷の本屋でルノワールのいい畫集を見つけた。そしてどうしてもそれが欲しくてたまらなくなつて、僕は昨日、たうとうそれを買つてきた」とある。
- 3 前掲『堀辰雄全集』(第三卷)、366頁。前掲の初出『プルースト雑記(神西清への手紙より)』『椎の木』10頁には、「金が足りなかつたので、僕は仕方なしにデュフィとモディリアニの畫集を買つてやつとそれを手に入れたのだ」とある。
- 4 前掲『堀辰雄全集』(第三卷)、366頁。前掲の初出『プルースト雑記(神西清への手紙より)』『椎の木』10頁には、「それほど僕はこのルノワールの畫集が欲しかつた。そして、ここにプルーストの影響がある!」とある。
- 5 吉川一義『プルーストと繪画——レブランド受容からエルスチール創造へ』岩波書店、2008年、96-97頁。
- 6 マルセル・プルースト『第七篇 見出された時 I』『失われた時を求めて12』鈴木道彦訳、集英社、2000年、55頁。
- 7 マルセル・プルースト『ルノワールにフランス美術のための特別展示室? (アンケート)』、『『オビニオン』紙、1920年2月28日号) 岩崎力訳、『プルースト全集15』筑摩書房、1986年、491頁。
- 8 前掲『堀辰雄全集』(第三卷)、366頁。前掲『プルースト雑記(神西清への手紙より)』『椎の木』10頁には、「こんな風に僕がコクトーを通してピカソの仕事に興味を持つたり、プルーストのおかげでルノワール等が好きになつたりするといふ事は、それを裏がへしにして見ると、コクトーはピカソから、そしてプルーストは印象派の畫家たちから多くのものを借りてゐるといふやうな事になりはしないか?」とある。
- 9 堀辰雄『美しい村』、『堀辰雄全集』(第一卷)筑摩書房、1996年6月(初版第5刷)、370頁。なお全集の本文は、『美しい村』(野田書房、1934年、85頁)に拠っている。

## 六本木のアートのとびら ― 国立新美術館教育普及事業の3年間 ―

2006年秋、開館前の国立新美術館の施設を見学する「建築ツアー」には、全国から5000件をこえる参加応募が殺到した<sup>1</sup>。それは、教育普及担当として着任して間もない私を少なからず驚かせ、新しいアートセンターに対する世間の注目度の高さを実感させる出来事であった。

日増しに膨れてゆく応募ハガキの山を前に、私は開館後の国立新美術館が相対するだろうマスが存在を強く意識していた。六本木という立地に加え、広大な展示スペースを擁して、企画展と公募展あわせると年間80本もの展覧会が開催される美術館。そしてアートライブラリーやアート commons を展開し、美術関連情報・資料の収集と発信の拠点となることを標榜しているアートセンター。そんな施設に集まる人や情報がどれほど膨大なものになるのか、建築ツアーに対する世間からの反応は、その答えをはっきりと示していた。

この東京の新しいアートセンターでは、幅広いジャンルに目を向けて、集積する情報を常に整理し、多くの来館者に応える教育普及活動を展開していかねばならない。建築ツアーを経て、私はそんな見解を得た。ハガキの山と格闘しながら、いよいよ国立新美術館の教育普及活動が始まるのだ、そう感じた。

それから3年と半年。国立新美術館は2010年1月に開館3周年を迎えた。3年という時間が長いのか短いのか、区切りとなるのかは捉え方次第だろうが、教育普及活動を一度振り返るにはいい機会であると思う。新たなアートスポットとして定着しつつある六本木で、私たちはこの3年間でどのように歩んできたのだろうか。

### 教育普及室の取り組み

「参加し交流し創造する美術館」。教育普及事業について、国立新美術館はこのようなキャッチコピーを掲げている。つまりは、館を訪れる人々が、芸術や美術館とより密接に関わりあう機会を積極的に提供していくことが、国立新美術館教育普及室が担う役割である。具体的には、講演会やワークショップの開催、インターンシップやボランティア・プ

ログラムの実施、教育普及関連資料の収集などが館の主たる教育普及活動となっている。

またその他、ミュージアムショップSFTに併設されたギャラリーの展示企画協力や、独立行政法人国立美術館が主催している「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」の実施、館の事業成果をまとめた『活動報告』の編集なども教育普及室の重要な仕事であるが、ここからはいくつかの中心的活动について詳しく述べていきたい。

### ワークショップ、講演会

「ワークショップ」は、もともと工房や作業場を意味する言葉であるが、近年では美術館で行われる体験型・参加型の講座の呼び名として普及してきた。国立新美術館では、開館当初からアーティストやデザイナーによるワークショップの開催に力を入れている。

教育普及室主催で年間8本前後開催されるワークショップは、次の4種類に大別される。

- 自主企画展の開催にあわせたアーティスト・ワークショップ
- 教育普及室が推薦した作家やデザイナーによるワークショップ
- SFTギャラリー出品作家やデザイナーによるワークショップ
- 参加者同士が言葉を介したコミュニケーションにより鑑賞を行うワークショップ



ワークショップ「デザインってなんだろう??～やってみよう! イスのデザイン～」(2008年9月28日開催)

大きな特徴として挙げられるのは、美術に限らず、ファッションやプロダクト・デザインなど、現代美術の周辺領域とも言えるジャンルを幅広く取り上げていることだ。それは館の展覧会事業の方向性とも重なる。開館後

最初に行われたワークショップも、アート・ディレクター佐藤可士和氏によるデザイン・ワークショップだった<sup>2</sup>。その後も内容にあわせて子どもから大人まで対象を変えながら、家具デザイン、写真、身体表現など多岐に渡るテーマのプログラムを実施している。

また、自主企画展の関連イベントでは、現役アーティストによるワークショップを充実させている。学芸課スタッフが推薦する作家を集めて毎年春に開催される『アーティスト・ファイル』では、絵画、彫刻、映像、インスタレーションなど様々な表現を展開する作家が登場、出品作家によるワークショップもアニメーション制作体験や石のオブジェ作りなど多彩な内容となっている。



シンポジウム「ウガンダのエイズ孤児、アーティストに出会う」(2009年7月11日開催)

国立新美術館で1年間に開催される展覧会数については前述したが、館で行われている講演会やアーティスト・トークも相当数に上り、公募団体等によるイベントもあわせれば、年間100回以上を数える<sup>3</sup>。この数の多さだけでも十分特徴的だが、「国立新美術館ならではの」プログラムをさらに充実させるため、教育普及室企画による講演会も毎年実施している。

これまで、クリスト・アンド・ジャンヌ＝クロードやクリスチャン・ボルタンスキー、宮島達男、皆川明らの各氏を招き講演会やシンポジウムを開催してきたが、著名な美術家やデザイナーの講演は人気が高く、260人収容の講堂が聴衆で埋まる。こういったプログラムは、表現者の生の声をより多くの人へ届けたいという趣旨で企画されるが、昨秋、ジャンヌ＝クロード氏の訃報に接した際、現役作家の言葉を聞く機会がいかに貴重なものであ

るかを痛感した。今後も国際的かつ有意義なプログラムの開催を続けてゆきたい。

### ガイドブック

ワークショップや講演会が、作家や普及室スタッフなどの人を介した教育普及活動と位置付けられるなら、美術館で配られるガイドブックは印刷物を介した教育普及と言えるだろう。国立新美術館では、自主企画展にあわせて鑑賞ガイドブックを制作し、来館者に無料で配布している。これまでに『アートのとびら』4冊と『ちいさなアーティスト・ファイル』2冊が発行され、制作部数は合計20万部をこえた。年間200万人以上が訪れる施設において、効率的に普及活動を行うために不可欠なツールとなっている。

鑑賞ガイドブック『アートのとびら』では、展覧会出品作品のうち数点を取り上げ、鑑賞者に作品についてのより深い思考を促すとともに、その作品につながる現代美術の流れについて解説を加えている。子どもから大人まで幅広い世代が読める言葉づかいで、なおかつ興味を持てる内容で、さらには展覧会の趣旨も的確に伝えられるように、毎号、工夫を重ねて作成される。日本語を母国語としない来館者に配慮して、英文が併記されている点も特徴として付け加えておきたい。

コレクションを持たない、常に外部から作品を借用して企画展を行う美術館において、現代美術のガイドブックを継続して制作できるのか、最初は不安視する声もあった。だが、着々と発行を重ねた『アートのとびら』は、いまやシリーズとして定着してきた。積み重ねることの大切さを、改めて感じている。



国立新美術館ガイドブック「アートのとびら」Vol.1～4

### インターン、サポート・スタッフ

人材育成もまた、美術館の大切な使命である。国立新美術館では2005年4月よりインターンシップを、2006年10月よりサポート・スタッフ制度を導入、若手研究者や学生に美術館での実践的な研究や活動の場を提供している<sup>4</sup>。

このうち若手研究者や大学院生を研修生として採用するインターン制度では、展覧会事業、教育普及事業、情報資料収集・提供事業の3部門に分かれて、研究員の指導のもと最長2年間、美術館での実務を経験する。受け入れ人数は毎年8名程度と少ないが、実践的な業務の経験を生かして修了後に美術館学芸員や関連職種に就く研修生も多い。また、個人的な見解になるが、専門的研究の経験と熱意を持った若者たちの、美術館活動に対する貢献度は高いと感じる。展覧会図録の編集補助や所蔵写真資料のデータベース作成など、細かい人的努力に拠る仕事の場での彼らの活躍は心強いものである。子ども向けの施設ガイドブック『てくてくマップ』も、教育普及室インターンの半年に渡る試行錯誤により生まれた<sup>5</sup>。新しい美術館だからかもしれないが、年度を重ねるたびに、館が若い力とともに育っていくような印象を持っている。

登録制でボランティア活動を行うサポート・スタッフ制度には、毎年50名をこえる学生が登録、教育普及イベントの進行補助などで活躍している。登録資格が大学または大学院に在籍している学生に限られること、活動は不定期で活動要請などの連絡は全てメールでやり取りされることなどが、国立新美術館サポート・スタッフの特徴であるが、その背景には、コレクションによる常設展示空間を持たない美術館であることや指導にあたる人員の不足など、長期継続型のボランティア育成が難しいという事情がある。受け入れる美術館側の状況にあわせて生まれた登録制のボランティア・システムだが、美術館事業に関心を持つ学生たちには、実務体験の機会を得られるこの制度を大いに利用してほしいと考えている。



夏休みアーティスト・ワークショップ「やってみよう、美術体操～名画、名作を体感～」(2009年8月22日開催)

### アートのとびら

開館と同時に発行された小さな冊子に、私たちは「アートのとびら」という名を付けた。「アートのとびら」という言葉には、現代美術の入門編とも言えるガイドブックであること、美術館を楽しむきっかけとなるようにとの意図、この冊子を足がかりに自分なりの鑑賞をしてほしいという思いなどが込められている。それは、教育普及活動全体にも通じる言葉であると思う。

外から美術館へと通じる入口を開き、来館者と美術の世界をつなぎ、人が美術に出会う場に立ち会うことが、美術館の教育普及事業を担う者の責務だと私は考える。だから、私自身もアートの扉でありたいし、美術館自体も、誰にとっても見つけやすいアートへの入口であってほしいと思う。

森美術館にサントリー美術館、21\_21 DESIGN SIGHT など、美術やデザインを楽しむスポットが続々生まれ、六本木がアートの街として集客力を強めている。急速に様相を変えるこの街で、国立新美術館が「アートのとびら」として確立していくために、私たちは高い意識と理想を持って、努力し続けねばならない。

吉澤菜摘(よしざわ なつみ 研究補佐員)

1 「プレ・オープニング企画 建築ツアー」は当初300人だった定員枠を700人に拡大して、2006年10月13,15,19,21日に計10回実施。また抽選にもれた応募者のために「建物見学会」を開催、10月26,27日の2日間、施設を見学者のために開放した。

2 教育普及室プログラム「教えて！可士和さん！」ワークショップ「自分のシンボルマークをつくろう！」(2007年3月24日開催)

3 「平成20年度業務実績報告書」(独立行政法人国立美術館、2009年6月)では、講演会やアーティスト・トーク、ワークショップ等あわせて117回実施と報告。

4 インターン事業は「国立新美術館設立準備室インターン」として開始。2006年7月の国立新美術館の機関設置に伴い、「国立新美術館インターン」と呼称が変更された。

5 「国立新美術館 施設ガイド てくてくマップ」(国立新美術館、2008年3月)

## アーティスト・ワークショップ

チャレンジ!抽象画  
～向き合う心、あふれ出る色～

講師：松本陽子(画家、『光』展出品作家)

2009年9月12日(土) 13:00-16:00

国立新美術館 別館3階多目的ルーム他

ワークショップは、松本陽子さんの作品が展示された『光』展の展示室から始まりました。多数の応募者の中から抽選で選ばれた10代～70代までの21人は、独特の手法で描かれた松本さんの作品を鑑賞し、作品に込められた思いなどについてお話を聞きました。別館3階に移動しての制作では、用意された四つ切サイズの画用紙に、水彩絵具や色

鉛筆、カラーペンといった描画材料を使って描いていきます。参加者の中には絵を描くのは数十年ぶりという人も。そんな緊張気味の参加者もいる中、「難しいとか、こんな絵を描いたら恥ずかしいとか思わずに、自由に色をつかって描いてください」との松本さんからのメッセージを受けて、制作はスタートしました。真っ白な紙を前に、太い刷毛で線を引いて指でのぼしたり、オイルパステルを塗り重ねて爪で削って表情をつけたり、一度ぐしゃっと紙を丸めて皺をつけてから描くなど、思い思いの方法で描き進めていきます。松本さんからアドバイスを受けながら、2時間ほどかけて仕上げました。自身の心とじっくり向き合い、湧き出してきた色や形が存分に表現された作品は、どれも力作ばかり。あらためて自由に描くことの楽しさを体験する一日となりました。



松本陽子氏(中央)



## アーティスト・ワークショップ

とらえよう、レンズの向こう側  
～デジカメで撮る抽象写真～

講師：浜田涼(美術作家)

2009年12月19日(土) 13:30-16:30

国立新美術館 別館3階多目的ルーム他

普段からカメラを使っている人も、カメラの操作に慣れていない人も、この日はカメラを「表現」するための道具として、気持ちも新たに撮影に挑戦しました。ワークショップの最初は、日常や記憶をテーマに写真を使った作品を手掛ける浜田涼さんのレクチャー。カメラや写真の歴史、表現としての写真作品についてじっくり理解を深めたら、いよいよ撮影タイムです。六本木の街を臨む国立新美術館の屋外や、ガラス張りの壁から光が降り注ぐ館内を会場に、参加者それぞれが自由に撮影ポイントを探します。カメラでとらえる対象は、風景や建物、人などなんでもあり。持参したカメラを使って、手振れやぼかしを用いたり、ユニークな構図を探すなどして、撮影を進めていきます。同じ対象を選んでも、とらえる角度や距離、ピントのあわせ方、シャッター速度によって、写し出される世界は異なります。最後は、各自が厳選した写真をプロジェクターで大きく投影し、みんなで鑑賞しました。小学校4年生から70代までの19人の参加者が撮影した写真は、どれも個性にあふれ、カメラを通して表現される世界の奥深さを感じさせるものでした。



浜田涼氏(奥)



2009年を振り返ると、デザインに関する展覧会が美術館で多く開催されていたことに気付きます。また、当館アートライブラリーでも、「新しい美術」を紹介するという方針のもと、デザインに関する資料を積極的に収集しています。今日、デザインは美術の中のジャンルとして確固とした位置を占めています。しかし以前はそうではありませんでした。今回は、デザインが美術として認識されるようになった軌跡の一端を、グラフィックデザインに注目し、デザイン雑誌の中からご紹介します。

『たて組ヨコ組』14号(1986年11月)の特集「デザイン雑誌：デザインのディスクールを巡る世界のデザイン雑誌1840-1986」では、海外と日本、デザインの動向とデザイン雑誌の創刊の時期が年表になっており、デザイン雑誌の歴史を辿ることが出来ます。



『たて組ヨコ組』14号(1986年11月)に掲載されている年表

この年表で紹介されている『アイデア』は、1953年の創刊以来、グラフィックメディアを中心に、海外の展覧会のレポートなど国際的な視点をもって、デザインの動向を日英のバイリンガルで紹介している雑誌です。

創刊号(1953年7月)の「『アイデア創刊に際して』」の言葉の中には、「新しい海外の文化をとり入れると同時に、日本の文化を紹介して、お互いに交流し合う」とあります。日本は戦後、デザインについての多くをアメリカから学んでいました。そのような状況の中、日本が持っている良いものを自分たちがもっと引き出し、世界にアピールしようと宣言しているのです。

『アイデア』が創刊された1950年代は、グラフィックデザインが、戦後経済や産業の復興と共に商品の販売促進や企業の宣伝に効果的な広告を制作するために活用されはじめた時代です。グラフィックデザインの活用が広まりを見せていく一方で、グラフィックデザインの職能や地位は世間に認められていませんでした。そこで、職業的地位の向上を願う人、芸術家として活動したいと願う人たちが、日本宣伝美術会、東京アド・アートディレクターズクラブ(現東京アートディレクターズクラブ)などの団体を結成します。また、二科会や二紀会といった既存の美術団体の中には商業美術の部門が新設されました。こうした団体が公募による展覧会を開催し、グラフィックデザインの啓蒙活動が活発になっていきます。

創刊から20年余り、創刊号の宣言を、行動に移したと思われる展覧会「日本グラフィックデザイン展 '77」が、『アイデア』により企画されました。この展覧会は、全米アート・ディレクターズ・クラブ(President: David Davidian)と日本グラフィック・アイデア実行委員会(委員長:石原義久)との共同主催による公募展で、日本の本格的なグラフィックデザインを初めて海外に紹介する展覧会として、ニューヨークのニコン・ハウスで1978年2月2日から、次いで同市のマスター・イーグル画廊で2月23日から3月22日まで開催されました。この展覧会を特集した『アイデア』147号(1978年3月)には、展覧会の開催目的が三つ記されています。一つ目は日本のグラフィックデザインの現状を海外に紹介すること。二つ目は日本のグラフィックデザインの水準の高さを、日本の制作関係者に認識してもらうこと。三つ目はこれからグラフィックデザイン界に参加しようとする若い人たちに指針を示すこと。そして、これらの目的がこの展覧会により達成され、展覧会が大成功に終わったという報告が『アイデア』148号(1978年5月)に掲載されています。この展覧会の議長を務めた虎新一郎氏は、同誌に寄せた「日本グラフィックデザイン展の反響について」で、以下のように述べています。「コマーシャ

ルかといったかつての感覚から一歩美術絵画並の地位に前進し始めた、という変化も大切な見逃すことの出来ないポイントでした」。

海外で行われたこの展覧会は、言葉の壁や、日本人の感性が外国人には理解されにくいという問題もあったようですが、一流のアートディレクターやデザイナーに評価されたこと、作品の何点かがニューヨーク近代美術館のパーマネントコレクションに加えられたことは、日本のグラフィックデザインのレベルの高さを証明し、グラフィックデザインへの認識を、広告のためのものから美術へと転換させるきっかけとなったのではないのでしょうか。

この展覧会は第3回まで開催されました。第2回展は1981年9月16日から10月26日までマスター・イーグル画廊で開催され、その内容は『アイデア、別冊』(1981年10月発行)に、第3回展は1984年6月6日から7月31日まで同会場で開催され、こちらもその内容は『アイデア、別冊』(1984年8月発行)にそれぞれ掲載されています。掲載作品の全てに制作者の解説が加えられ、日本の代表的なグラフィックデザインの制作意図や作品の背景を知ることのできる興味深い資料となっています。



『アイデア、別冊』(1981年10月発行)

参考資料：  
『1950年代日本のグラフィックデザイン：デザイナー誕生』  
(印刷博物館編、国書刊行会2008年9月発行)

奥村嘉子(おくむら よしこ 情報資料室研究補佐員)

念願の国立新美術館移行から早くも3度目の二紀展を迎えました。不況と新型インフルエンザの流行が重なり出足への影響が危惧されましたが、会期中は比較的好天に恵まれ入場者数も32,000人に達し、好評裡に終了しました。

ところで、会期中日曜日の午後になりますと、国立新美術館の二紀展会場ではマンモスとカブトムシの紙工作を持ち歩く子どもたちの笑顔に出会えました。これは特別企画「こどもハサミ工房」に参加した子どもたちの笑顔です。休憩室を利用して、昨年に続いて今年も実施し、約300組800人の家族連れで大変盛り上がりました。“来場者の皆さんに喜ばれる二紀展”をモットーに、質の高い作品と来場者へのサービスに注力した成果のひとつでもあります。



こどもハサミ工房

二紀展は、国立新美術館の公募展示スペースの半分に当たる5,000㎡の展示室と野外展示場630㎡に、絵画作品900点と彫刻作品120点を目一杯に展示しましたが、鑑賞していただく経路は一本とシンプルにして、全ての作品が一巡でご覧になれるように配慮しました。

鑑賞順路が1.5kmと比較的長い展示空間となりましたが、会場が1階、2階、3階に分かれていますので、移動の不便は多少ありますがかえって特徴を活かした美術空間が演出でき、堪能していただけたと考えています。従来の会場では鑑賞者になかなか足を運んでいただけなかった野外展示場の彫刻作品も、木

の香りが漂う大彫刻室の彫刻も、絵画に包まれる様に順路に組み込みましたので、散策気分でも十分に楽しんでいただけました。

会場構成では、絵画の目玉をいきなり入口の第1室で演出しましたが、ここには二紀展以外での個展やコンクールで入賞するなどの活躍をした新人群の作品を紹介しました。20～30代が半数以上を占める若々しい作品群で衆目を集めました。一般公募の入選者も20代が最も多く、当会の新人育成の姿勢が若い世代に受け入れられた成果でもあります。

“情実を排しつつ、新人を抜擢し、これを積極的に世に送ることに務める。”

これは、創立以来の「二紀会主張」の中の一項目ですが、より具体的な施策として“半農半獵”で会の活性化を、との合言葉も大切にしています。団体は、種を蒔き息長く作家を育てる農耕社会。他方、新人は積極的に獵に出て他流試合で腕を磨き、その成果を二紀展に競って発表しよう、との考え方です。新人に刺激を受けてベテラン勢も切磋琢磨する。さらに支部活動を通して、地方より新人を発掘、育成し二紀展に送り込む。このような環境の中から、画壇に新たな人材を送り続けており、これら地方との交流の成果が最も顕著に現れているのが、地方巡回展です。

今年も名古屋・京都・広島・福岡に加え長崎・金沢・浜松の7都市で開催しますが、地方支部が受皿となって運営し、来場者総数は国立新美術館来場者を凌ぐ40,000人超の勢い



二紀展会場

です。加えて全国37支部が競い合うように熱心に研究会や支部展を行っていることも、私共の大きな財産といえます。

一方で、二紀展の来場者が年々増えている背景には、やはり画壇で活躍している中心作家群の作品の魅力が大きな役割を演じていることも忘れてはなりません。

二紀会の中心作家の作品は、1階の第2室から順次鑑賞いただき、第7室に実力作家の作品を揃えました。2階の会場では中堅の会員・同人の多様な作品群を紹介し、併せて新人室で次代を担うフレッシュな作家の作品を並べ、3階の会場では一般入選作品の展示を行いました。二紀展のもう一つの楽しみは、この一般入選作品の質の高さと新鮮さにあります。見飽きない作品群が出口の第33室まで続きます。

会場が広くなったので、展示作品も漸次増やしていますが、それでも250人近くの一般公募作品が陳列できないもどかしさを、毎年痛感しています。

特別企画の美術講演会では、ジャンルを超えて、世界的な科学者で大村美術館館長の「大村智先生を講師として招き、「美術と私——科学者の回想」と題した重厚で多彩な内容の講演をいただき、参加者250人が大きな刺激を受けました。

そのほか当会の気鋭の委員による美術研究会、1週間をとおして行われたギャラリートーク等、いずれも一般公開で開催され、好評を博しました。

我が国の美術界をリードする作品の創造と新人の育成に注力し、“来場者の皆さんに喜ばれる二紀展”を今後ともめざしたいと思います。

(社団法人 二紀会 事務局)